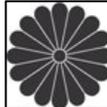


受賞者：伊江村字西江上区

(沖縄県国頭郡伊江村)

天皇杯
受賞年：令和元年



むらづくりの経緯

・昭和50年代前半まで農業しかない島で農業生産額が低迷、過疎化が急速に進行する中、若者がいなくなり活力が無くなるとの危機感あった。また、離島であり産業や観光資源に乏しく、生活は農業に頼らざるを得ない実情の中で、農業所得を向上させ、将来の村づくり・担い手確保など、“島の生き残りをかけた農業の振興”が課題となっていた。

・イーハッチャー(負けん気性、進取の精神)な西江上区は、区政委員会で「若者に魅力ある農業」を基本理念として、水有り農業(天候に左右されない計画的にかんがいが可能な農業)への転換を図り地域を活性化するため、農業用水の確保を住民一丸となって推進した。

受賞当時

生産活動の特色

○昭和54年以前は、農業生産額は15億円程度で農家1戸あたり160万円程度であったが、水有り農業への転換を推進し、平成29年現在、農業総生産額は約43億円、農家1戸当たり1,200万円程度まで伸びた。

○新規就農者、後継者、若手担い手農家などが多く、栽培技術や畜養技術の向上意欲が旺盛で、地域の牽引役となってIoTなど新技術導入も図られている。

○島外への人口流出に歯止めがかかり、若者が戻ってくるようになった。働き手が増えたことにより、当区に活気とゆとりが生まれたことで、新たな産業の開拓が行われ、農家で宿泊体験する民泊、生活研究会による地元特産品を使った商品の開発及び伝統料理の継承などが行われるようになった。

地域づくりの特色

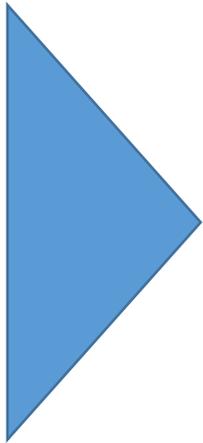
○島の特産品の開発
・水あり農業により農業振興が図られたことで、数々の特産品の開発につながり、6次産業化が増えてきている。

○集落の環境保全と次代につなぐ取組
・耕土流出等の環境への影響を未然に防止するため、地域を挙げて環境保全に取り組み、子供達への農業体験活動も実施している。

○都市農村交流
・修学旅行を主とした民泊は、地域住民と共同で活動するなど、都市と村の交流における農村の魅力を発信している。また、民泊を経て伊江村内に勤務、定住している者もいる。

～受賞直後の効果～

・他地域からの視察等あり、新型コロナウイルス禍にあっても、地域の取組は継続



現在

評価ポイントの取組状況

○後継者や担い手農家が主体となって、団体を構成し、栽培技術の研鑽等(キクの苗を直挿する栽培方法や島らっきょうの収穫を機械化する等)を行い、地域の牽引役となっている。

○品評会では、農林水産大臣賞を地区内若手農家が受賞するなど意欲の高い取り組みを行っている。

○水あり農業への転換により、高収益作物の導入(ウコン等の他品目の試験栽培)に取り組んでいる。

○伊江島産100%の落花生や黒糖を使った新たな商品を開発するなどの取り組みを行っている。

○多面的機能支払交付金の取り組みも地域住民等の積極的な参加があり、継続実施している。

○新型コロナウイルスの影響で令和2～3年の民泊の受け入れが大幅に減少していたが、令和4年以降、増加している。

今後の展開

○後継者や農業生産の基盤は整っており、島らっきょうや紅芋などの6次産業化による所得向上や農業経営の学習を促進

受賞者： 一般社団法人竹田文化共栄会 (福井県坂井市)

内閣総理大臣賞
受賞年：令和元年



むらづくりの経緯

- ・「竹田文化共栄会」は旧丸岡町竹田の山林資源の保全、森林経営を目的に昭和39年に設立。
- ・木炭離れや銅山の閉山による人口減少など危機感があり、地区のほぼ全戸が加入する「竹田文化共栄会」を中心に地域で話し合いを進めて平成26年に「竹田の里将来ビジョン」を作成した。
- ・旧竹田小中学校校舎を改修した体験型宿泊施設の竹田農山村交流センター(愛称「ちくちくぼんぼん」)を運営し、これを活用したグリーンツーリズムや林業体験、県内外の学生や行政が連携して地域課題を解決し魅力発信する「竹田Tキャンプ」の活動などを通じ、交流人口の拡大に努めている。

受賞当時

生産活動の特色

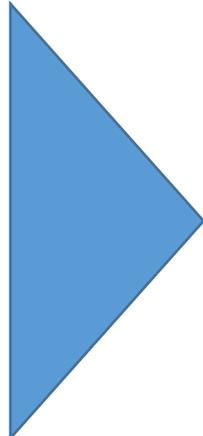
- 「竹田文化共栄会」は、地域が所有する山林の管理を通して自然環境や国土の保全、生態の保護など森林が持つ多面的機能を維持・向上させるため森林の整備を行うとともに、地域の文化振興と増進を図る活動にも取り組んできた。
- 会員は100軒(約280名)と、地域の全戸が加入している。
- 設立して50年以上が経過し、林業生産のみならず行政機関と連携して竹田地域の活性化を担う組織へと成長している。

地域づくりの特色

- 平成26年、区長会をはじめ農林業から福祉など地域に関わる様々な組織と一緒に「竹田の里将来ビジョン」が策定され、これを契機に廃校となった小中学校校舎をリノベーションし、体験型宿泊施設「ちくちくぼんぼん」を整備した。当施設に子供や若者などを招き入れ、農山村の伝統文化を伝承しつつ、地域一丸となった交流事業が活発化した。
- 共栄会は竹田地区の地域おこしの受け皿として坂井市の指定管理を受け、体験型宿泊施設「ちくちくぼんぼん」のほかに、直売所「竹田水車メロディパーク」、キャンプ場「たけくらべ広場」、レストラン「ラクラルテ」(運営委託)などの事業を展開。
- これらの施設を拠点に、県内外からの交流人口を拡大。さらに緑の協力隊、地域おこし協力隊、お試し移住など、積極的に他所からの新たな人材を受け入れることで、地域の活力を高めている。

～受賞直後の効果～

- ・マスコミ等で取り上げられ、来訪者や視察が増加
- ・地域住民のモチベーションが向上し、一体感が深まった



現在

評価ポイントの取組状況

- ビジョンが着々と実現し、体験交流施設「ちくちくぼんぼん」開所後、県内外からの利用者が伸び、交流人口の増加に大いに貢献。
- 地域おこし協力隊卒業生の定住(R6年度時点で5名)や女性向けお試し移住体験、大学生による地域おこし(過去10年間で340人の学生が参加)などの取り組みにより、竹田地域に関心を持つ若い世代も増加傾向にある。
- 交流人口が増え、竹田地区全体が賑わっている。地元に係わる離村者を含めた若手世代が中心となり、自分たちにも何か地域のためにできることはないかと、自主的に任意の団体を作り、地域活性化を取り戻すための新たな活動を始めている。



人材不足で開催が困難となっていた盆踊りを復活、多くの住民に喜ばれている

今後の展開

- 竹田地区は、都市部からも近く、また山中温泉、永平寺の中間点として観光需要も見込める。「ちくちくぼんぼん」など核となる施設の認知度も高まっており、今後はさらに定住・交流人口の増加を期待し、空き家を活用したシェアハウスの運営などの取り組みを強化していく。
- 既存施設やイベントの充実を図り、周遊の仕組みを工夫することで、「地域全体でグリーンツーリズム」の実現を目指している。

受賞者：由良地域協議会「ゆらまちっく戦略会議」（山形県鶴岡市）

日本農林漁業振興会会長賞
受賞年：令和元年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

- ・昭和56年には、行楽客や海水浴客が年間約45万人が訪れ、民宿や旅館、ホテルに宿泊する等にぎわっていたが、レジャーの多様化等により、平成20年度には30万人を下回り、その後も減少傾向が続いていた。また、由良地区の主産業である漁業従事者も減少し、漁業離れが顕在化していた。
- ・平成19年に、地元漁業者等の若手有志が「チームTARA」を結成し、恵まれた地域資源を内外にアピールするため動き出すとともに、自治会や観光協会、漁業団体等に呼びかけ、都市住民との交流や魚食の普及など地域の活性化のため、平成21年に「再び訪れたくなる、住みたくなる、自慢したくなる“ゆら”」を目指し、由良地域協議会「ゆらまちっく戦略会議」を設け活動することになった。

受賞当時

生産活動の特色

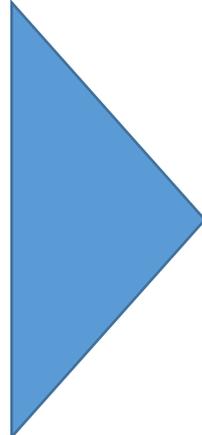
- 市場価値が低い未利用魚（小鯛、小型のタコ）を活用し、地域の昔ながらのだし「小鯛だし」、味付けして煮たタコを乾燥させた「おつまみ干しだこ」を開発・販売し、所得向上につながる取組を実施。
- 「由良港大漁祭」等において、魚介類の販売や漁業体験（地曳網等）メニューの提供を通じて、にぎわいを創出。
- 休業していた市所有の釣り堀を借り受け、地元漁港で水揚げされた魚を放流することで、多くの釣り客でにぎわっているほか、地域の情報発信基地として活用。
- 漁業従事者が減少する中、他地域から1名の青年漁業者が移住し漁業に従事しているほか、漁業体験を通じて、漁業を生業にしたいと希望する高校生や若者が出てきている。

地域づくりの特色

- 漁港等の整備において、地元の要望を取り入れ、人工磯場、公有水面埋立てによる多目的広場と駐車場が整備され、地域住民の憩いの場となるとともに、多くの観光客が利用しており、交流人口の増加に結びついている。
- 地域で使用されていない旧フィッシングセンター内に、食事もできる「海テラスゆら磯の風」を開設し、協議会の女性メンバーで組織する「ゆらまちっく海鮮レディース」が、地元漁港で水揚げされた魚を調理・提供しており、女性の活躍の場となっている。
- 漁業の体験学習や定置網乗船など、体験型メニューを提供しており、年間1,000人を超える観光客があり、安全を確保するため、救急救命士の資格を取得し、受け入れ態勢を整備。
- 裸足で歩ける由良海岸を目指し、海岸に漂着する海ごみ収集活動を企業と共同で取組むなど、環境保全活動に力を入れている。

～受賞直後の効果～

- ・講演、視察依頼の増
- ・他地域との連携創出
- ・社会情勢の変化に対応するため、新たなビジョン「ゆら“未来予想図”」を策定し、住民一体となった行動の実現



現在

評価ポイントの取組状況

【生産活動】

- ・「ゆらまちっく海鮮レディース」では、県のオーダーメイド型補助金などを活用し既存の加工場の改修を行い、新たな商品を開発。販売してくれる店舗数も増え、ふるさと納税の返礼品にも活用されている。
- ・コロナ禍以降大規模なイベントは行われていないが、食イベントやイカ一夜干し作り体験などの開催と地域の情報発信に取り組んでいる。
- ・釣り堀は引き続き市から借り受け、地魚を放流していることで釣り客からは人気が高くマスコミにも取り上げられ、入場者が増加している。
- ・漁業者が減少する中、新たに他地域から移住し漁業に就業したり、地元青年が漁業に就業する等後継者が育ってきており、さらに中高生の就業体験者も増えている。

【地域づくり】

- ・昨年度「海業の推進に取り組む地区」に認定され、これまで以上に漁港や人工磯場、施設を活用した漁業体験学習や観光メニューを提供している。
- ・コロナ禍で一時利用者が減少したが釣り堀、漁業体験、食の体験には年間7千人以上の来客があり、交流人口拡大につながっている。
- ・海岸漂着ごみの収集活動では、「除プラ機」の開発を鶴岡工業高等専門学校との共同研究などに取り組み、環境保全活動を継続している。

今後の展開

- 海業の推進と新規漁業就業者の確保
- 魚食普及と新商品の開発
- SDGs No.14 海の豊さを守ろう。海岸環境保全活動